

知的障害者の自己決定に関わる問題理解プロセス遂行の特徴(2)

—比較の観点を抽出する手続きに焦点をあてて—

○川西 邦子

吉澤 洋人

今枝 史雄

菅野 敦

(東京都立羽村特別支援学校) (東京都立清瀬特別支援学校) (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科) (東京学芸大学)

KEY WORDS: 知的障害 問題理解 比較の観点

I. はじめに

成人期知的障害者の近年のキーワードとして自己決定が挙げられている。Wehmeyer, M, et. al (1996)は自己決定には問題解決能力が関係するとしている。今枝ら(2017)はこれまで提言されて自己決定プロセス、問題解決プロセスおよび知的障害者の学習特性を踏まえ、「知的障害者の自己決定の選択プロセス」を提案した。自己決定に含まれる選択行為には選択する選択肢(対象物)の理解(以下、問題理解)が必要であり、そのプロセスとして「要素の抽出」「要素の整理」「観点の命名」「特定」「自己説明」が含まれるとしている。

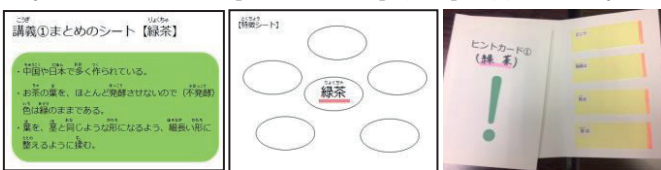
以上を踏まえ、成人期知的障害者の生涯学習支援の取り組みであるオープンカレッジ東京では、自己決定の選択肢(対象物)の理解に関わる能力の形成を目指す「ディスカバー講座」と称する地理講座を開催している。2016年度は「世界の茶」を題材にした「ディスカバーWorld II」を実施した。

本研究では、「ディスカバーWorld II」の講座内容の報告とともに、問題理解プロセスの達成状況について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

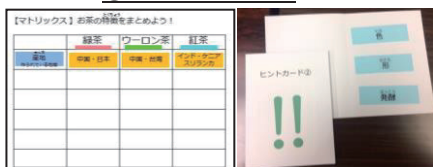
1. 対象者:成人期知的障害者 42名。平均年齢 32.8歳(±8.5)であった。

2. 講座の流れ:①**講師による講義:**世界の「お茶」の種類、原料、飲まれている地域、発酵の違い、茶葉の色や形の違いを学んだ。②**要素の抽出(お茶の特徴をまとめる):**「緑茶」「ウーロン茶」「紅茶」に限定し、箇条書きで示された講義のまとめ(資料①)から、お茶の特徴を表す言葉を抽出した(資料②)。言葉の抽出には、「ヒントカード」(資料③)を取り入れた。「ヒントカード」の要請があった対象者には、「どこで」「色は」「発酵は」「形は」という観点が書かれた付箋を渡し、これを手掛かりに言葉を抽出できるようにした。この活動は「緑茶」「ウーロン茶」「紅茶」の順に行った。



資料①まとめのシート 資料②特徴シート 資料③ヒントカード

③**観点の命名(マトリックス表にまとめる):**3種のお茶の「特徴シート」にある付箋を「マトリックス表」(資料④)に整理し、観点を命名した。観点の命名が自ら困難な場合は「色」「形」「発酵」と書かれた「ヒントカード②」(資料⑤)を用意し、要請に応じて渡した。④**特定(お茶の違いを比べる):**3種のお茶の葉の違いを比べ、お茶を特定した。特定後、特定した理由も問うた。⑤**講師による講義:**講座のまとめをした。



資料④マトリックス 資料⑤ヒントカード②

3. 手続き:今枝ら(2016)は、知的障害者は二つ以上の選択肢を比較する際、自ら観点を抽出することが難しいとしているため、本研究では「観点の命名」までにいたるプロセス

の遂行状況を明らかにした。「要素の抽出」「観点の命名」のプロセスについて対象者の達成率を算出した。「要素の抽出」では対象物である「緑茶」「ウーロン茶」「紅茶」ごとに達成率を算出した。達成水準は①支援なしで自らプロセスを遂行できた「達成」、②ヒントカードを提示した「ヒント提示」、③ヒントカードと支援者の声掛けが必要だった「ヒント提示+支援」、④支援者が答えを提示した「答えの提示」の4水準とした。

III. 結果

1. 「要素の抽出」プロセスの達成状況

「要素の抽出」プロセスについて、3種のお茶ごとにその達成率を算出した結果を図1に示す。

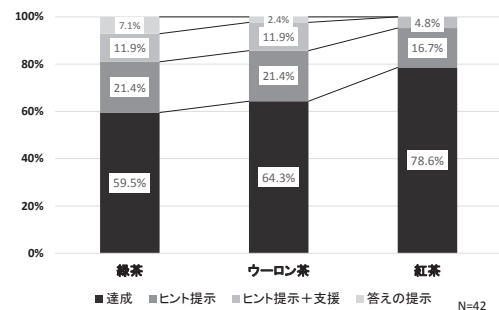


図1 要素の抽出プロセス 対象物別 達成率

図1より、講座展開順に、徐々に「ヒントカード」の活用や支援の割合が減り、対象者自らが取り組むことのできた「達成」の割合が増えた。

2. 「観点の命名」プロセスの達成状況

「観点の命名」プロセスについて、達成率を算出した結果を図2に示す。

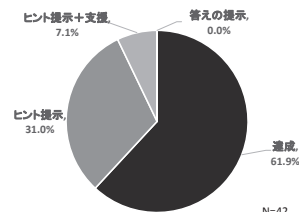


図2 観点の命名プロセス 達成率

図2より、対象者の31%が、「ヒントカード」の活用により、個別の支援がなくても達成することができた。

IV. 考察

「要素の抽出」「観点の命名」どちらのプロセスにおいても、20~30%の対象者が「ヒントカード」によって達成できた。よって、「ヒントカード」による段階的な支援が効果的であったと言える。また、「要素の抽出」は同じ手順を3回繰り返すことでヒントの活用の割合が減っていることから、「ヒントカード」による学習効果があったと考える。

V. 今後の課題

今後は、「観点の命名」以降の「特定」「自己説明」のプロセスにおいても、学習者自らの取り組みを促す具体的な操作ツールを検討していく必要がある。

(KAWANISHI Kuniko, YOSHIZAWA Hiroto, IMAEDA Fumio, KANNO Atsushi)